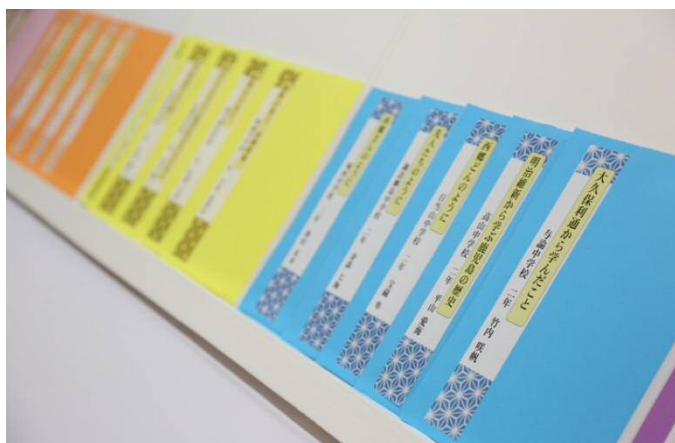


# 展示イベント

## 1 作文コンクール応募作品展示





## 「維新未来博」作文コンクール入賞一覧

### 〈小学生の部〉

最優秀賞	喜界町立早町小学校	小6	中村 陽菜	人を育てる力
優秀賞	鹿児島市立田上小学校	小5	稲田 祐子	薩摩おごじょ天璋院篤姫
優秀賞	薩摩川内市立里小学校	小6	山下 煌生	ぼくの維新プロジェクト
入選	鹿児島市立中郡小学校	小5	池田 煌司	将来をいつも夢見た薩摩の偉人たち
入選	鹿児島市立清水小学校	小5	瀬戸 あかり	日本を変えたスーパーヒーロー
入選	十島村立悪石島小学校	小5	片野田 奏	私にとっての島津斉彬
入選	南さつま市立加世田小学校	小5	大江 涼乃	わたしがあこがれる日新公
入選	薩摩川内市立可愛小学校	小5	北山 愛実	西郷さんから学んだ正しく生きる道
入選	鹿児島市立坂元台小学校	小6	福森 光優	批判されても、強い心で
入選	鹿児島市立明和小学校	小6	山野 結子	私が目指す研究者像
入選	いちき串木野市立羽島小学校	小6	久保 鐘子	19名の思いを受けついで
入選	鹿屋市立西原台小学校	小6	藤田 葉月	偉人からの教え
入選	奄美市立宇宿小学校	小6	豊田 安梨	私の先生、西郷どん

### 〈中学生の部〉

最優秀賞	奄美市立名瀬中学校	中1	赤井 洸太	現代から見た西郷さん
優秀賞	志布志市立伊崎田中学校	中2	野村 大和	先人たちの歴史
優秀賞	始良市立重富中学校	中3	藤崎 琴子	「西郷どん」に学ぶ
入選	鹿児島市立武岡中学校	中1	河野 綺星	きばれ 一歩ふみ出す勇氣を持って
入選	鹿児島市立天保山中学校	中1	古川 綾乃	私の尊敬する人物
入選	鹿児島市立吉野中学校	中1	永吉 健人	誇れるふるさと鹿児島を守るために
入選	阿久根市立阿久根中学校	中1	佐潟 八重	薩摩のために
入選	霧島市立舞鶴中学校	中1	吉田 妃愛礼	薩摩の偉人、西郷隆盛
入選	鹿児島市立城西中学校	中2	濱田 未来	西郷さんのように
入選	十島村立諏訪之瀬島中学校	中2	金森 七海	先人たちのように
入選	霧島市立日当山中学校	中2	宝藏 隼	西郷どんのように
入選	肝付町立高山中学校	中2	平山 愛海	明治維新から学ぶ鹿児島の歴史
入選	与論町立与論中学校	中2	竹内 咲帆	大久保利通から学んだこと
入選	鹿児島市立鴨池中学校	中3	札元 彩音	郷土の偉人への恩返し
入選	鹿児島市立武中学校	中3	稲田 愛子	薩摩の秀才、松木弘安
入選	いちき串木野市立羽島中学校	中3	江畑 大星	明治維新150周年をむかえて
入選	鹿屋市立第一鹿屋中学校	中3	的場 麗太郎	明治維新
入選	与論町立与論中学校	中3	鶴田 小春	カッコいい人間

### 【参考】応募総数

(	小学校の部	:	<u>119</u> 校	応募数	<u>1,067</u> 点	)
(	中学校の部	:	<u>44</u> 校	応募数	<u>354</u> 点	)





明治維新150周年を契機に、明治維新时期の郷土の歴史や先人達の生き方を「若者らしい新しい視点」を持って、自発的・能動的に学び、調べ、発表することを通じ、郷土に対する理解や愛着をより深め、それらを後世に継承するとともに、鹿児島県の将来を支える人材の育成に資するため、高校生等を対象とした明治維新に関するテーマ研究発表を実施しました。

### 参加校（10校11組）

学校名	研究テーマ
鶴丸高等学校	家老が創った明治維新 ～鹿児島に残るリーダーたちの足跡～
甲南高等学校①	明治技術の活用
甲南高等学校②	明治×鹿児島～郷土の暮らしの変化～
鹿児島玉龍高等学校	吉野町歴史観光推進の建白書
大口高等学校	曾木の滝と明治維新～伊佐地方の川内川開発 による殖産興業政策について～
志布志高等学校	フェリー「さんふらわあ」で 知られざる志布志の歴史をPR!
南大隅高等学校	観光客向けのウォーキングマップ作成
大島高等学校	愛加那から紬ぐ「結いの心」
古仁屋高等学校	日本スイーツの聖地～よみがえる奄美大島 白糖製造工場～
沖永良部高等学校	「西郷どん」体験in沖永良部
与論高等学校	産業の近代化と与論～日本の産業革命を 支えたユンマンチュの魂～



### 事前学習講座

研究を始めるにあたって、審査委員の先生方の講座を受け、調査研究の方法や、計画の検討を行いました。



### 審査委員

- 岩川 拓夫 氏 (株式会社島津興業 仙巖園)
- 東川 隆太郎 氏 (かごしま探検の会)
- 下豊留 佳奈 氏 (郷土史研究アシスタント)
- 本田 静 氏 (株式会社宙の駅)
- 内西 昭文 氏 (県教育委員会高校教育課)



# 古仁屋高等学校

県立古仁屋高等学校 2年

濱田 怜弥  
岩木 乙香  
奥村 芽生  
福沢 あさひ

最優秀賞

## 久慈白糖製造工場とは？

1865年から67年にかけて、島内4か所に建設された、近代  
的製糖機械による日本で最初の白糖製造工場の一つである。奄美  
大島の山がちな地形が集約的大規模工場の建設を阻み、4箇所に  
分散して建設された。海岸に近接し、背後に小高い山を控え、河  
川が近くを流れており、集落に隣接した平坦地に立地された。代  
官所に隣接した金久(29人以上)は管理拠点で、須古(66人)  
と久慈(29人)は主力工場だった。鹿児島から100人以上も  
の大工や石工が動員され、1865年に金久(奄美市名瀬)と須古  
(宇検村)で、1866年に久慈(瀬戸内町)と瀬留(龍郷町)で  
工場建設が始まり、2年かけて全て完成した。久慈工場は縦90  
メートル、横27メートルの2階建てと非常に大きく、土台にれ  
んが、溶結凝灰岩の切石を使用し、中ではオランダ製の蒸気機関  
による製糖機械が稼働した。煙突が7本あり、そのうち蒸気機関

の排煙を行っていた最長の1本は高さ36メートルにもなり、山  
を隔てた隣の村からも見えていたという。他の6本は高さ18メ  
ートルで、加熱用かまどの排煙を行っていた。屋根はトタン葺き  
であった。

その後、白糖の製造は順調に行われたが、燃料である薪の不足や、  
度重なる台風と洪水による被害などにより、1~3年程度で廃止  
に至る。一番長く操業したのが久慈の白糖工場であったが、それ  
でも5年で廃止に至った。

黒糖の生産は、薩摩藩の重要な財源であったが、徳川吉宗が享  
保の改革(1716年~)において全国にサトウキビの栽培を奨  
励すると、高松藩が特産物創生と財源確保を目的としてこれに呼  
応した。その後、徳島藩でもサトウキビが領内各地で栽培できる  
までになり、高松藩とほぼ同時期の1700年代末に精糖方法を確  
立させた。これら和三盆と呼ばれる他国産の上質な砂糖の台頭に

より、幕末期に黒糖の価格が下落し、藩は経済的に打撃を受けた。  
そんな中、島津斉彬は、1851年に第11代薩摩藩主に就任し、  
鹿児島城内にあった花園精錬所で白糖製造を命じ、見事に実験は  
成功した。しかし、大量生産ができなかったことや、斉彬が1858  
年に急逝したことにより、本格的な生産には至らなかった。

次に白糖製造が計画されたのは薩英戦争の年(1863年)であ  
る。薩英戦争でイギリス軍の捕虜となり、罪人として長崎に潜伏  
していた五代才助(後の友厚)は、そこでグラバーと懇意になり、  
海外情勢の知見を深めた。五代は、富国強兵の諸策を記した建議  
書を薩摩藩に提出したが、その中には、上海貿易を推進し、その  
利益で製糖機械を購入して白糖製造を行い、さらに留学生を派遣  
し、その際に軍艦や大砲、紡績機械等を買付けることが記され  
ており、このような取組が「オオシマ・スキーム」の原案である  
と考えられている。

## 白糖工場模型の作成

白糖工場は、世界自然遺産に匹敵する観光資源であることが  
分かった。そこで、町民ですらその存在を知らない白糖工場の  
存在を、復元模型を作成することで内外にアピール使用と考え  
た。気をつけた点は以下の通りである。

### ① 資料をできる限り集めて、しっかり読み込む。

- 水田丞 2017 「第2章 奄美大島製糖工場」『幕末明治初期の洋式産業施設とグラ  
バー商会』九州大学出版
- 水田丞 2004 「旧薩摩藩奄美大島白糖製造工場の建設経緯とその復元の考察  
○イギリス資本から見た集成館事業の研究(1)」『日本建築学会計画系論文集 第585  
号 p.177-184
- 鹿児島県立糖業講習所 1935 『慶應年間 大島郡に於ける白糖の製造』鹿児島  
県立糖業講習所
- 丸山雅子 2015 「ウォートルス①」『ファインスチール』第59巻3号 一般社  
団法人日本鉄鋼連盟 p.11-12
- 丸山雅子 2015 「ウォートルス②」『ファインスチール』第59巻4号 一般  
社団法人日本鉄鋼連盟 p.11-12

### ② 50分の1スケールで正確に復元する。

### ③ 当時の白糖製造の流れを明らかにする。

以上の3点を念頭に実行するにあたり、問題が山積みとなったが、  
一つ一つクリアにしていった。

△ どうやって資料を集める？

→専門家(大島支庁・田中完さん)の力を借りる





写真中央が田中さん

田中さん  
ありがとうございます  
ございました。

- △ 資料を読み込む力が足りない。  
→ 地歴公民の先生方の協力をいただく
- △ 模型作りの経験がない！  
→ 校長先生（機械工学専門）の力を借りる



校長先生  
ありがとうございます  
ございました。

ら依頼されたグラバー商会は、イギリスのコーウェン（COWEN）社が製造した耐火レンガや、植民地で製造したと思われるレンガ（ステファンソン（STEPHENSON）と刻んである）を用意した。その後、白糖工場の建設技師であったウォートルスが日本人の手のサイズに合うレンガを作り、工場の建屋には主にそのレンガが使われ、最初の日本レンガの一つと言われる。このレンガは大阪に持ち込まれて普及し、改良を重ね日本各地のレンガ建築に使われ、後に久慈に日本軍の水溜が建設されたときも使われた。「レンガの里帰り」である。現在も工場跡付近で当時のレンガを見ることができる。



須古集落では、「COWEN」と書かれた耐火煉瓦を見ることができる。イギリス北部で耐火煉瓦メーカーとして成功したジョセフ・コーウェン社で製造されたもの。

## 日本レンガ史のルーツ

白糖工場の研究過程で、工場に使われていたレンガが、日本の近代建築における最も古いレンガの一つであることがわかった。蒸気機関（スチームエンジン）は、すさまじい振動と熱を発生させるため、国外から輸入した耐火レンガで囲い込む必要があり、薩摩藩が



写真中央が鼎さん

### 佐世保海軍軍需部大島司庫（久慈）

（久慈湾に停泊する軍艦に給水する水を蓄める。「レンガの里帰り」の話は、瀬戸内町埋蔵文化財センターの森丈太郎さんから教わった。）

### 「白糖石」

現在でも島内各地で「白糖石」を見ることができる。このネーミングの由来が、白糖工場の建屋や機械の布基礎として使われていたことと知って驚いた。島内では石材の確保が困難であるため、島外から持ち込まれ、白糖工場の閉鎖ともない払い下げられた。そして現在に至るまでさまざまな方法で利用されている。その正体は溶結凝灰岩で、鹿児島で起こったカルデラ噴火によって噴き出されたものである。鹿児島では、屋外と柔らかく加工しやすいこの石で有名な石橋などを作ってきたが、白糖工場を建設するにあたり、大量の

凝灰岩切石が船便で持ち込まれ（重かったであろう）、工場や機械の基礎に使われたのである。



小学校の塀に使用（久慈）



民家で「花壇」として使用（宇検町須古）

まるで  
プランター





↑復元模型でも確認できるのでご覧ください。



ウォートルス

## 外国人技師の活躍

白糖工場の建設は、グラバーが請け負い、1865年にグラバーが奄美大島に来島した記録も残る。実際の工事は、アイルランド出身の建築・機械技師、ウォートルス（30歳くらい）や、白糖製造技師のマッキンタイラー（35歳くらい）が金久の秋葉山（現在の蘭館山）に建てられた洋館に住みながら、指導に当たった。総監督のウォートルスは、奄美大島での白糖工場建設のあと、大阪造幣局の近くにある応接所として使われていた泉布観（1871年）という建物や銀座の煉瓦街（1873年～1877年）の建設にも携わり、ウォートルスの時代とも呼ばれている。



銀座の煉瓦街

## らんかん橋節

大水（うくむいでい）ぬ出（いじ）てい

らんかん橋洗流（あれいなが）らち

（ハヤシ）スラヨーイ ヨーイ

らんかん橋洗流（あれいなが）らち

（ハヤシ）ランカンバシ アレイナガラチ

忍（しぬ）てい来（きゅ）る加那や ヤーレー

泣ちどうまた戻（むど）る

（ハヤシ）スラヨーイ ヨーイ

泣ちどうまた戻（むど）る

（大水が出て、らんかん橋が洗い流され、忍んで来た恋人は逢いたい人に逢えずに、泣き泣き戻った。）

この島唄は、ウォートルスが暮らしていた洋館（蘭館）の島の女性「ましゅ」との悲しい恋物語から名前が付いたとされている。なお、蘭館があった付近は現在蘭館山とよばれ、名瀬を一望することができる。

## 白糖製造跡を巡るバスツアー

白糖工場跡を観光資源として役立てるために、小学生向けのバスツアーを企画した。単なる「高校生の研究」にとどめず、小中高が連携した「オール瀬戸内」の研究の端緒としたいと考えたからである。小学生が関心を高めやすいものにするのが重要だが、埋まっただけで跡形もない上に40キロ以上離れている工場跡に連れて行っても退屈である。ただし、その道程には世界自然遺産候補の森や海岸、かつて瀬戸内が奄美大島要塞であった歴史を残す戦跡があるので、これら他のスポットを絡めたツアーを考えるようにした。これを「シリアル・ノミネーション」と呼ぶそうである。

さらには、白糖工場に関連するレンガの水溜跡や白糖石を「ヒント」として、このツアーを「謎解きツアー」とし、さらには小学生に人気の某探偵アニメのキャラクターを拝借することで、小学生の関心を得られるよう工夫した。



## バスツアーの実際

「季節感」を出せばもっと楽しめる内容になり、継続的に行えるのではないかと考え、時季的にふさわしい「ハッピーハロウィーン」イベントとした。



参加者 29 人 (写真は一部) コスプレを楽しみながら

バスでの移動時間が退屈なものにならないように、謎解きにつながるクイズ (戦跡や地元に関する内容) で盛り上げた。途中、手元にある弾薬庫跡に寄ったが、ハロウィンの雰囲気と意外に合っていた。(右上写真)

かいとうりからのようじんしょう  
「しろいダイヤモンドの  
なぞをとけ」

このツアーは、かいとうりが 150 名ほど  
にせとちてつくられていた「しろいダイヤモンド」  
をさがしているというしるしをめぐりながら、  
なぞとをきしながら、かいとうりもバスでまわっ  
ていく。

この日 10 月 28 日 土曜日 9:00~  
しるしめぐり 8:50  
しるしめぐり 8:50

←案内状

←アンケート用紙



久慈小学校跡の白糖石を見て、白糖工場との関連を学ぶ。



←かいとうり



某人気探偵アニメの力を借りたら絶大な効果が得られ、白糖工場と水溜のレンガとのつながりのレクチャーも大変盛り上がった。

白糖工場跡で記念撮影。理想を言えば、久慈集落に白糖工場を模した発掘記念館が建設されることが望ましい。

濱田怜弥君、大活躍！  
一躍、地元では子どもたちの  
ヒーローに！！





最後は、復元模型を見て、製糖方法について学んだ。  
白糖工場ツアーということで、お菓子の配布も行った。今後、白糖工場にちなんだお菓子を協力してくれるメーカーとの共同開発を考えている。

(評価) ※アンケートより

- かいとうりがいたからたのしかった。
- かいとうりが出てきてなぞをとくのが楽しかった。
- ガイドの人がわかりやすくおしえてくれて楽しかった。
- 子どもたちが夢中で、いい伝承方法だと思った。

## 久慈集落での講演会

白糖工場跡のある久慈集落で講演会を行った。本校文化祭における白糖工場研究の発表を大変喜ばれ、今回の講演会でも大変なおもてなしを受けた。



久慈集落の方々には、今後白糖工場跡の「語り部」となることが期待されている。久慈が白糖工場という観光資源の要となるよう、今後も協力していきたい。

### 県外・インバウンド観光客向けの観光コース作成

このほど、奄美大島5市町村と奄美大島観光物産連盟が県外・インバウンド観光客向けの、5つのテーマに沿った観光パンフレットをつくることになった。その一つが白糖

工場であり、白糖工場研究をしていた本校も協力することになった。その中で、久慈白糖工場跡への道のりを観光コース化したアイデアを提供することにした。

題して

### 「日本スイーツ聖地巡礼ツアー」。

#### 1. せとうち海の駅 (スタート)

屋内に白糖工場コーナーを設置し、白糖工場の復元模型を見て、地元スイーツを楽しむ。(写真はイメージ)



#### 2. 地元のスイーツを味わう。



・お茶のふじえん 抹茶ソフト

・田原製菓の黒糖かりんとう



### 3. 地元の歴史を学ぶ。

弾薬庫跡 (手安)



旧日本軍水溜 (久慈)



瀬戸内可がかつて奄美大島要塞であったことを今に伝える「近代遺跡」が、きわめて良い保存状態あちこちに残っている。

### 4. 自然を見る。

白糖工場跡へのルート上には、世界自然遺産候補の森があり、さまざまな自然を楽しむことができる。



照葉樹林

### 5. “聖地・久慈の白糖石” (ゴール)

久慈白糖工場は、わが国で最初に稼働した近代工場の一つであり、県の事業で発掘されたことがある。その経緯や発掘の様子をパネル展示し、地元のスイーツも販売する施設“白糖工場記念館”を設置し、来てもらう。また、久慈集落の方々が語り部として、その歴史を語ってくれる。(写真はイメージ)



※ 海の駅の白糖工場コーナーと“聖地・久慈の白糖石”構想は、まだ実現していない。今後町などに協力を頂き、提案通りとはいかなくても、それに近い形での実現を目指したい。

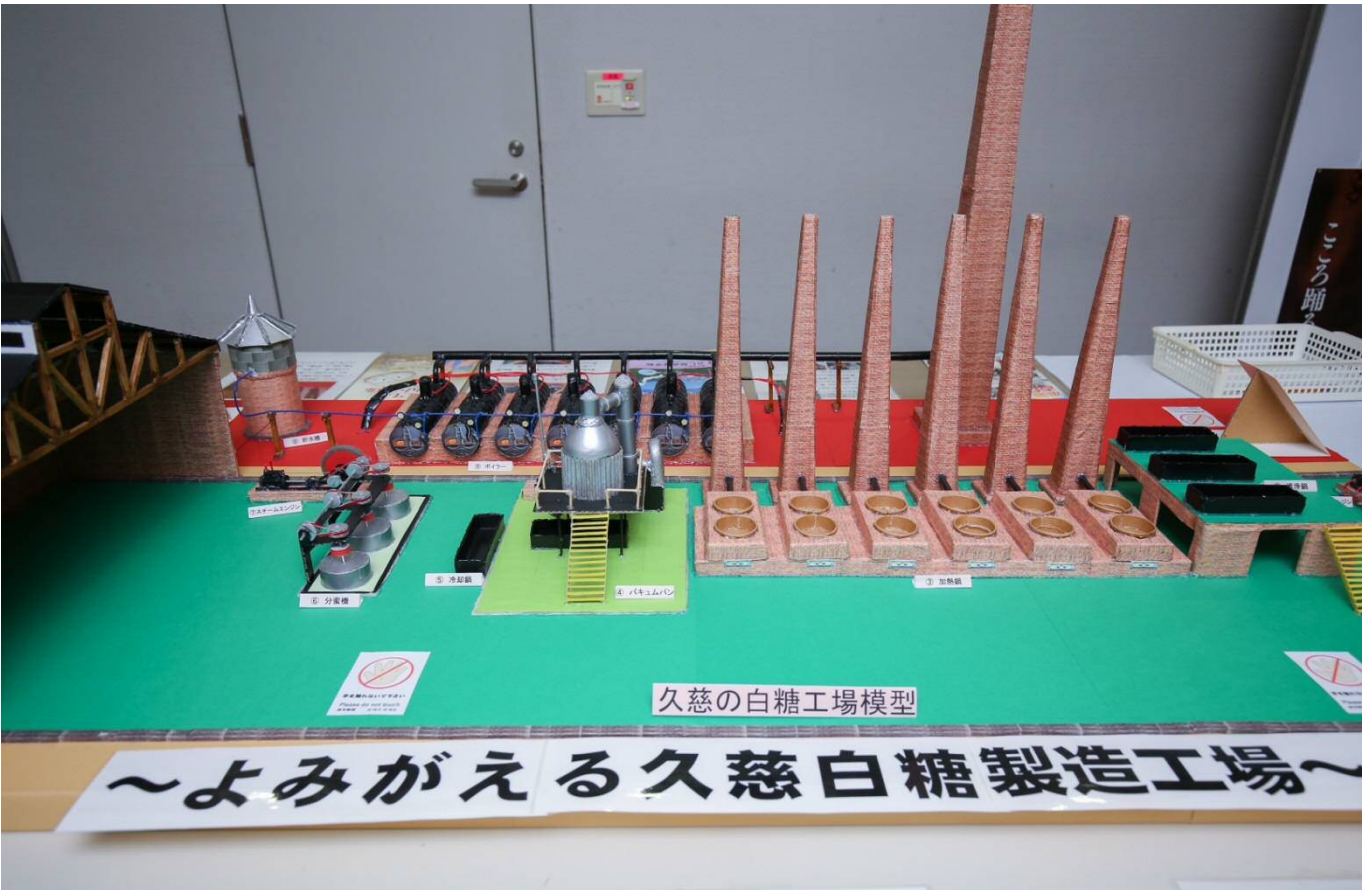
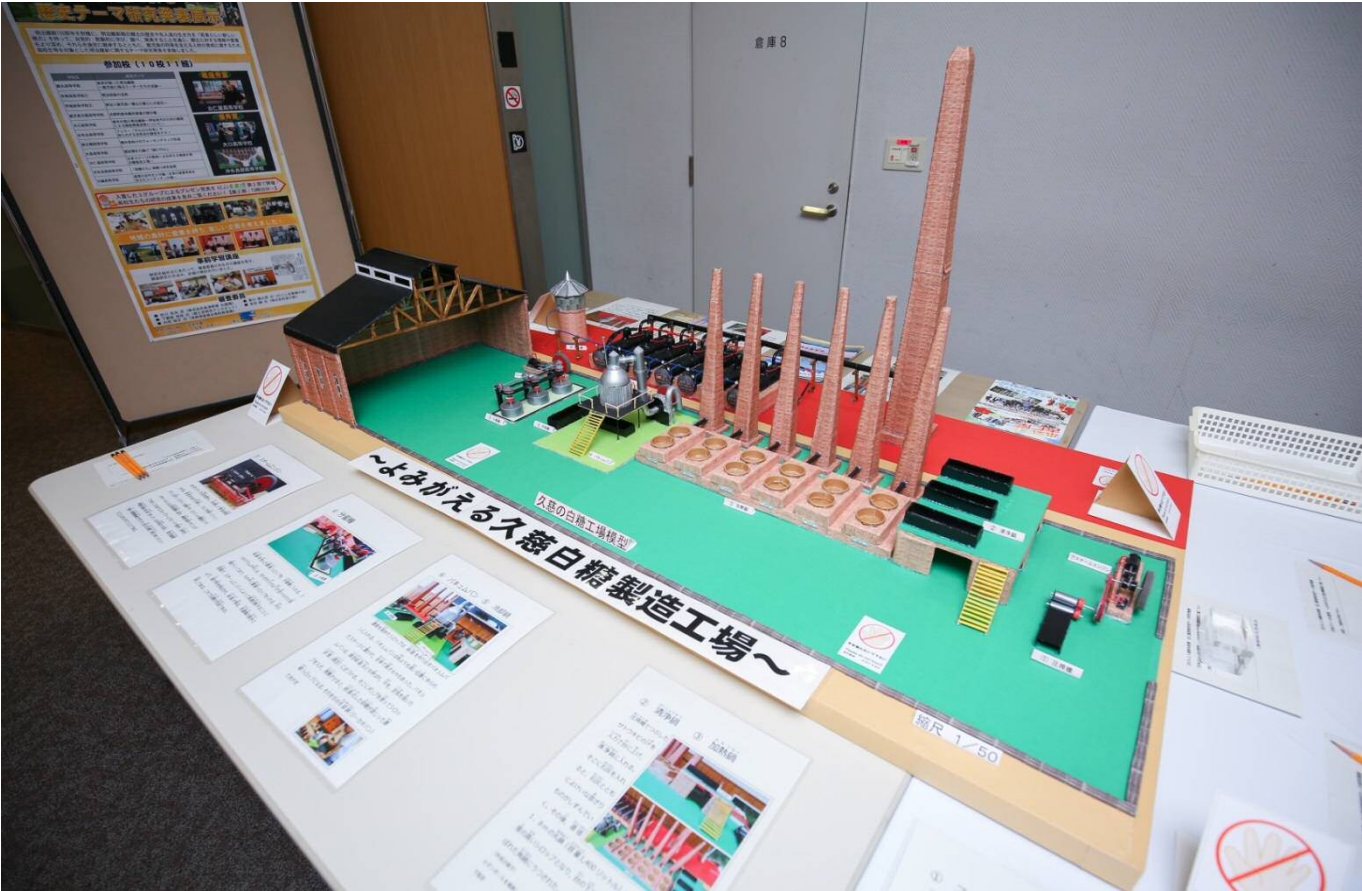








# 会場での模型の展示





# 大口高等学校

優秀賞

県立大口高等学校 2年

前原 亜弥香  
山下 紗矢  
瓦 渚沙  
黒木 千春

## 曾木の滝と明治維新

～伊佐地方の川内川開発による殖産興業政策について～

大口高校研究グループ

### 1. はじめに

大河ドラマ「西郷どん」が放送され、鹿児島県の明治維新のころに注目が集まったので、地元の伊佐市ではどうだったのかと思った。

その中で、特に注目したいと思ったのが、フォトジェニックスポットとして注目を浴びている「曾木発電所遺構」である。明治維新におけるこの地域の近代化の到達点と言えるのではないかと考えた。また、調べてみると天保期に川内川の「川凌え」があったことを知った。今回調べてわかったことを多くの人に知ってもらい、伊佐地方の魅力を発信し、地域活性化につなげていきたいと考えた。

### 2. 川凌えについて

#### (1) 天保期の状況

天保期間は連年の凶作であった。このため農民の疲弊が甚だしく年貢滞納者もあらわれた。伊佐地方でも天保7,8年のころには、大飢饉のため疲弊し、農民は皆家財道具を売り払って飢えをしのぎ、農業を放棄して四方に流浪する農民もいた。また、伊佐地方は冬期の寒気が厳しく、牛馬の不足を痛切に感じているところに牛馬の病死があいついだ。このような状況では、神仏に頼るしか方法はなく、原田にあった忠元廟に大口の主だった面々がそろって祈願したところ、霊験あらたかであったため、忠元神社創建への話が進行した。天保13年(1842)に藩主島津斉興に忠元神社創建を願い出て、神殿は天保15年(1844)に完成した。**資料1**

資料1 忠元神社



#### (2) 堀之内良眼房について **資料2**

- ・文化5年(1808)に大口に生まれる
- ・西原八幡神社の宮司で、農民の困窮ぶりを見て、救済の思いを強くもち、次のような勸農事業を行った

- ①上納米運搬の困難の除去 → 藩の倉を宮之城から移築し、川内川の水路を開発する
- ②藩金300両を借用して180頭の牛馬を導入し、農家に貸し付けること
- ③大口目丸の湿田30町歩の排水工事をするとともに、灌漑用貯水池を築くこと

#### (3) 川凌え事業にいたるまで

- ・家老の調所広郷から許可をもらい、当面の資金として500両をもらう(総工事費は2000両)
- ・天保13年(1842)1月17日、鶴田郷神子轟から工事を始める**資料3**
- ・堀之内良眼房は工事現場の最高責任者として活躍

#### (4) 川凌え工事について

当時の川には、奇岩怪石が多く立ち並び、人畜も通過困難であった

- ①焼石工法→石の上で火をどんでん焼き、冷たい水で急冷することでヒビを作り、それに沿って次々とくさびを打ち込む**資料4**
- ②合図方法の確認→竹の節を抜いた竿を使って話したり、竹でメガホンに似た器具を作ったり遠方へは五色の旗色と記号を定め合図し合った

#### (5) 川凌え工事の結果

- ・藩倉庫(米蔵)の建設に取り掛かった
- ・天保14年(1843年)7月には、7庫の米蔵が、上の倉と下の倉の2カ所に分散して完成した **資料5**

・川凌え工事が行われる前は、石ころの多い山坂の狭い山道を農民は年貢米を馬の背に乗せ運ぶ必要があった。さらに、宮之城に到着しても年貢を納めるまでに2,3日かかることも多かった。

・天保14年9月10日巳の刻(午前9時)に年貢米を乗せた船が出発した。その船は、2時間で船着き場に到着した。農民は重たい年貢米を運ぶ必要はなくなった。

資料5 下木場の藩倉庫上の倉跡(左)と船着き場(右)(写真提供:東哲郎氏)



資料2 堀之内良眼房の遺品

(堀之内進氏蔵 鹿児島県歴史資料センター黎明館保管)



鉈



并当箱

(長さ 柄 70.5cm 刃 28cm 刃の幅 5.8cm)



水路として開削された部分

資料3 神子轟の航空写真

岩場の上流の高さは3m、下流は6m、長さは約110m、船の通る水路幅は3m。(写真の右側が上流)

資料4 権太郎石について

「焼石工法」を用いて活躍した石工のひとりが小野村の権太郎である。(右の写真はその活躍をたたえた石碑のレプリカ)



小野村は現在の鹿児島市小野で小野石と呼ばれる加久藤カルデラからの火砕流堆積物で出来た溶結凝灰岩がある。曾木の滝周辺の川内川の岩も小野石と同じ加久藤カルデラ由来の溶結凝灰岩であり、権太郎は石の扱いを分かっていたのである。

### 3. 曾木発電所

#### (1) 野口運について

日本窒素肥料(後のチッソ、現在のJNC)を中核とする日窒コンツェルンを一代で築き、朝鮮半島で電力事業を行ったため、「電気化学工業の父」や「朝鮮半島の事業王」などと称される。のちの旭化成や積水化学の創業者でもある。

鹿児島県の鉱山師から電気会社の設立を持ちかけられ、水力発電を利用した曾木発電所の事業を開始。後に、水保にカーバイド工場を設立。

#### (2) 設立について

**きっかけ** 野口 運が電気会社の設立を持ちかけられる。

内容	鹿児島で鉱山をしている人達が曾木の滝付近の牛尾・大口・新牛尾の3つの金山に電気がほしいため発電所をつくってほしい。
問題点	調べていく、費用が20万円かかる。800キロぐらいの機械を1つ運ばなければいけないが一文もない。
解決	シーメンス社から機械を買い、後払いにする。機械を持っていれば何とかなる。



**(3) 発電所について**

	第一発電所	第二発電所
送電開始	明治40年(1907年)10月	明治42年(1909年)10月
出力	880kW	6,360kW
発電機	800kW (シーメンス・シュッケルト社製)	1,500kW (シーメンス・シュッケルト社製)
水車	1,250馬力 (フォイト社製)	2,250馬力×4基 (フォイト社製)
送電線 電圧	11,000V	20,000V
送電距離	34.8km	34.8km
現在	水害に遭い、遺構は流されるが、導水路跡は曾木の滝公園内の散策路として整備 <b>資料6</b>	昭和40年(1965年)、鶴田ダムの建設による水没のため廃止その後、放置されていたが、補強工事などが行われ、平成17年に国の登録有形文化財となる <b>資料7</b>

**資料6** 第一発電所遺構



導水路跡



ヘッドタンク跡

**資料7** 第二発電所遺構



操業時の曾木第二発電 (写真提供: 伊佐市)



第二発電所



水車発電機



発電所技術者



ヘッドタンク(水槽)



ヘッドタンク  
(奥は番人控所)

**(4) カーバイド工場設立について**

第一発電所は発電量の半分しか消費されなかった

水俣にカーバイド工場設立(明治41年)

第二発電所設立し、水俣工場に送電を開始

(明治41年8月)

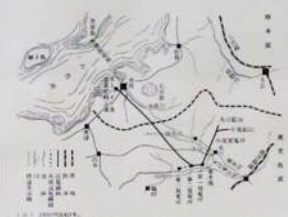
カーバイド工場は月産15トンの製品を出した

**資料8**

当初は水俣から20km北の熊本県佐敷町計石(現在の葦北郡芦北町)や8kmほど南の鹿児島県中出水村(現在の出水市米ノ津)を候補として考えていたが、水俣からの強い工場誘致の働きかけにより、水俣に設立することが決まった。

**日本窒素肥料送電線略図**

(『旭化成八十年史』11ページ 引用)



**資料8** 水俣石灰窒素会社内

(写真提供: 伊佐市)



**4. まとめ**

今回の研究を通して、伊佐地方の歴史から明治維新とのかかわりを考えると、殖産興業がキーワードとなる。曾木発電所は発電という産業の近代化のひとつの到達点であり、化学工業という工業化の次の段階への出発点ともいえる。その原点を考えると、1830~1843年の天保年間でも、農民たちがどのようにしたら負担を減らせるかを概念におき、新田開発などの農業を中心とした殖産興業が盛んであったということがいえる。その一つとして、堀之内良眼房の川渡え工事があった。これらが伊佐地方での明治維新に向かっていく殖産興業の原点といえる。

**5. 研究成果の発表**

- ①第10回伊佐市青少年健全育成大会兼伊佐さわやかあいさつ運動推進大会  
(日時:平成30年10月20日 場所:伊佐市文化会館)
- ②第57回曾木の滝公園「もみじ祭り」 **資料9**  
(日時:平成30年11月25日 場所:曾木の滝公園)

**6. 今後の展開と課題**

様々な団体が曾木発電所遺構周辺で活動を行っているが、歴史的な背景にまで触れることがなかなかできていない。そこで、曾木の滝周辺の歴史的な背景を説明して、遺構の意義を知ってほしい。とくに、曾木発電所だけではない伊佐の魅力に歴史的な面からも気がついてもらいたい。各団体の活動を歴史で「つなぐ」ことが私たちにできることではないかと考え、3つのことを提案したい。

- ①水面からの案内(サブ、カヌー体験での案内)
  - ②伊佐市観光特産協会が行っている <夏季限定!『幻の発電所遺構』ツアー>での案内
  - ③伊佐市観光ボランティアガイドの会「伊佐の風」に若い力を
- 課題としては、水俣カーバイド工場のあった水俣との関わりをどのようにしていくかということがある。産業の近代化という一見輝かしいものに思えるが、その影として公害病すなわち水俣病の原点の地でもあるという視点も忘れてはならない。

**7. 最後に**

伊佐の歴史を調べて、今まで何も知らなかったことが多くあり、たくさんの発見があった。この地方の先人たちの行動力を受け継ぎ、私たちがこれからの活動を行っていきたい。最後に、この研究に協力してくださった方々に感謝したい。

**8. 参考文献**

- 『天保の川渡えとその史跡』 東哲郎 著 (『南九州郷土研究第30号』) (2018年)
- 『大口市誌 上巻』 大口市郷土誌編さん委員会 編 (1981年)
- 『風雪の百年 ナツ株式会社史』 ナツ株式会社 発行 (2011年)
- 『旭化成八十年史』 旭化成株式会社 発行 (2002年)
- 『資料第一集新納忠元公没後四百年記念誌 新納武蔵守忠元公伝』 伊佐市郷土史誌編さん委員会 編 (2010年)

**資料9** 「もみじ祭り」で配布した資料



# 沖永良部高等学校

優秀賞



県立沖永良部高等学校 2年

内山 希生  
久松 紀代夏  
宮元 美法

～西郷と川口雪蓮の関わり～

## 『西郷どん体験』 in 沖永良部



西郷が作った「いか餅」  
島民に伝えた

鹿児島県立沖永良部高等学校 2年  
内山 希生・久松 紀代夏・宮元 美法

### ◎研究の課題

- ① 沖永良部での西郷隆盛の生活について調べる
- ② 沖永良部と西郷隆盛との、当時から現代までのかかわりを知る

西郷より先に島に渡された雪蓮が西郷の元に訪れたことから親交が始まった。  
2人は密会を繰り返し、雪蓮が西郷に書と歌を送りつけた。  
のち、鹿児島に帰った雪蓮は西郷家の家令と化した。  
南州基地にある西郷隆盛の墓の墓標は雪蓮が書いた。

動機 ] 2018年：明治維新から150周年、大河ドラマ「西郷どん」の放送（沖永良部もロケ地に）  
→ 沖永良部との「西郷さん」のつながりを知らない自分たち → 調べてみよう

### 遠島命令書

### I 調査・研究について

#### 1 沖永良部での西郷隆盛

遠島当初：吹きさらしの屋外の格子牢（西郷の衰弱、命の危険を島の役人・土持政照が心配）  
→ 屋内の座敷牢へ移す（遠島命令書に「阻いの中に入れよ」とあるのを根拠とした）  
→ 島の役人や青少年、川口雪蓮との交流など、沖永良部の人や風土の中で1年半の生活  
⇒ 「敬天愛人」の思想へ発展（その後の西郷隆盛に大きく影響を与えた）

#### 2 土持政照について

西郷の面倒を見続けた島役人。父は沖永良部の代官を務めた土持綱政。幼少期は鹿児島島の父の下で学び、沖永良部へ戻る。当時は間切横目（警察官）。座敷牢建設など、西郷を献身的に支え、西郷から多くを学び、「義兄弟」の契りも交わした。のち与人（村長役）として島のリーダーへ。明治になると、初代和泊戸長を務めたほか、息子は和泊村の初代村長となるなど島の発展を支えた。  
今回調べていく中で、土持政照は大久保利通とも関わりがあることが判明。大久保利通の父・大久保次右衛門はかつて沖永良部の代官付役として2度赴任しており、島妻との間に娘が2人いたが、その一人が土持の妻となる。つまり、土持政照は大久保利通の義理の妹の主人となる。  
つまり、「土持政照は西郷隆盛、大久保利通の両者と義兄弟の人物」ともいえる。

#### 3 西郷隆盛が沖永良部に残したこと

#### 義兄弟の契りを結ぶ西郷と土持 ▶ 文久3年(1863年)三月の末

(1) 制度①「社会趣意書」  
天災による飢饉への対策として西郷が土持に示した。明治3年に土持が全島民を対象に「社会」を設立した。日本初の農業共済制度ともいわれ、今日の農協と金融機関の役割も果たす。また、病院の設置経営や、人材育成のための奨学金支給など、島の発展に大きな役割を担った。

(2) 制度②「与人役大替」「間切横目大替」  
人民の幸せは、上に立つ役人の善し悪しで決まること、だから、役人は自分のための欲をもたず、人民をかわいがることが大切である。また、警察官は罪人を罰することよりも罪人が出ないように指導し、善行は大勢の前で表彰する。また、病氣や不幸な者をいたわり助ける。

(3) 人材及び教育  
座敷牢で、西郷から直接講義を受けた20人ほどの青年が、のちの和泊や知名の戸長・村長を務めたほか、医者や教育者となって沖永良部島の発展に大きく貢献した。また、西郷の弟子たちは「五百学友会」「和泊後進会」を立ち上げ、その二つが合併した「新進会」を設立して後進の育成に力を注ぎ、政治・法曹・医学・教育の世界へ人材を輩出した。

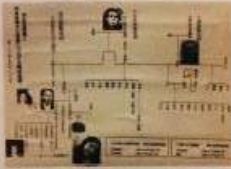
#### 4 現在も伝わる西郷

西郷の牢があった和泊地区を中心に当時の遺跡が現在でも残っている。  
和泊町では、小学校低学年を中心に「肝心（ちむぐくる）教育」が行われている。より小さなうちから西郷南州翁や郷土の先人の教えを道徳教育の一環として学んでいる。

#### 手習いの様子 ▶



土持政照  
西郷の教えを受けて沖永良部のリーダーとして活躍。二人の息子も和泊の初代二代の村長となる



→ 沖永良部にいても必要不可欠の人物



#### ◀ 社会について

凶作の年に備えて豊作の年に米、粟、麦などを高倉に蓄える。  
飢饉のときには島民に配給する。

#### 操 坦勁

西郷から「家族みんなが互いに助け合い仲良く暮らしていくには、自分の欲を捨てることである」という「生き天楽間」を学んだ。



「坦勁様」と書かれている。

《坦勁宛てに西郷が書いた手紙》



5 調査・研究の結果・考察

◎結論 沖永良部なくして明治維新なし 西郷から始まる沖永良部の発展

沖永良部に来た西郷は、久光の怒りもあって命を落としても不思議ではなかったはずだが、沖永良部の役人や島民との心からの交わりの中で命をつなぎ、「敬天愛人」の思想を固め、その後の明治維新の偉業を成し遂げた。つまり、沖永良部の人たちがいなければ、その後の西郷はなく、明治維新も違うものであったかもしれない。沖永良部にとっても西郷が残した「人材」や「制度」のおかげで豊かな島作りを成し遂げることができた。西郷と沖永良部は切っても切れないものとなった。



II 調査を活かした企画・提案

◎企画・提案のコンセプト

- ① 島外からの観光客に沖永良部島の良さを味わってもらおう「西郷体験」
- ② 島の子もたちが、歴史を学び郷土の先人を理解する「西郷体験」

- 1 企画プランA 『西郷体験』和泊ラリー ～西郷さんと座禅を組もう！～
- ①ねらい：西郷南州記念館を中心に「目と心と体で西郷を体験」する。
  - ②対象：西郷隆盛に関心のある人、他の観光の合間や、船・飛行機の待ち時間がある人
  - ③場所：和泊周辺、西郷南州記念館から1時間程度を歩いて回る。
  - ④特典：復元半へ入半し、西郷さんの隣で座禅を組み、記念撮影。
  - ⑤工夫：あえて短時間で設定し、誰でも気軽に参加できるように企画した。

短時間で誰でも気軽に！  
西郷とツーショット可



和泊周辺を  
誰でも歩ける！！

- 2 企画プランB 「沖永良部『インスタ』ラリー  
～癒やしの島で『西郷』と『絶景』を巡ろう～
- ①ねらい：プランAを含む、沖永良部島全体の魅力を紹介し、また紹介してもらおう。
  - ②対象：時間をかけて沖永良部の魅力をスマートフォンなどで写真に撮れる人。
  - ③場所：西郷関連だけでなく、ドラマ「西郷どん」ロケ地のほか、沖永良部全島にわたる絶景地を、写真確認によるスタンプラリー方式で観光客のプラン、持ち時間に合わせて回る。
  - ④特典：パンフレット等の提供のほか、「沖永良部インスタ大賞」の応募資格。  
\*「インスタ大賞」では観光客が撮った写真の中から年に一回大賞やその他の賞を決定し、当選者には地元名産を賞品としてプレゼント。写真は観光協会や町のHP等で紹介するなど、沖永良部をPRする素材として使用していく。
  - ⑤工夫：経費のかかるスタンプ台の設置などをせず、観光客の写真を利用して確認する。  
「インスタ映え写真」で観光客の興味を引く。 △→西郷関連

目指せインスタ映え！  
☆1年中いつでも誰でも参加できる  
☆1日コース・半日コースあり



- 3 企画プランC 「西郷ウォークラリー ～西郷先生が歩いた道～」 □→西郷どんロケ地
- ①ねらい：「肝心教育」の体験型学習を行う。
  - ②対象：地元小学生、ボランティアとして中学生や高校生がサポートする。
  - ③場所：西郷が上陸した「伊延港」から「和泊地区」まで「西郷が歩いた道」を歩く。その後、南州神社等で講話などによって西郷隆盛について学ぶ。
  - ④工夫：中学生・高校生も参加することで「沖永良部版・郷中教育」とし、歴史を伝承する。

肝心教育に  
フィールドワーク導入！



- 4 企画実現に向けての課題
- ①経費の負担 → 周知のためのHP運営やチラシやポスターなどの経費を誰が負担するか。
  - ②提携店やスポンサー企業 → 観光客への「食」の開発や、各種クーポン・景品等の提供元。
  - ③永続性 → 一時的な企画で終わらせないための、行政や観光協会等との連携の方法。